

## なごや街角今昔

## 【7】 栄…移動した「栄町」

池田 誠一

## 1 名古屋を代表する街角

栄の交差点は、名古屋を代表する街角といえるのではないのでしょうか。特に30年位前までは「栄町」と呼ばれ、名古屋人がまち(都心)をイメージするときの中心にありました。

栄の街は、江戸時代の城下の大火の後、碁盤割地域の南端を拡幅して広小路と呼ばれたのに始まります。広い通が人の集まる場所になり、賑やかな繁華街になりました。(図1) 明治20年には市街の西のはずれに出来た名古屋停車場まで延長拡幅され、次第に名古屋を代表する通になっていきました。

ところが考えてみると、当時の街の中心は今の栄の交差点ではなく、西に500<sup>メートル</sup>ほど行

った本町通の交差点にありました。今の栄の交差点は、碁盤割の通の一つと交差する目立たない街角だったので。

その目立たない街角が、何時どうして名古屋を代表する場所になったのでしょうか。栄の街角に立って、その経過を追いかけてみたいと思います。

## 2 栄の歴史

## (1) 江戸時代の広小路

江戸時代の初め、名古屋の街の中心は本町通にありました。なかでも碁盤割地区の北の京町筋から、南の伝馬町筋(札の辻)の付近までは有力な商店等が並んでいました。

ところが1660年の万治の大火の後、碁盤割地区の南端、堀切筋の焼けた部分が拡幅されて、広小路と呼ぶ広い通が出来ました。大火の後に出来たため防火が目的とされていますが、拡幅された所は街の風下に当たるため、理由はよく分かりません。出来上がった通には売店や見世物などが並び、次第に城下第一の繁華街になっていったのです。

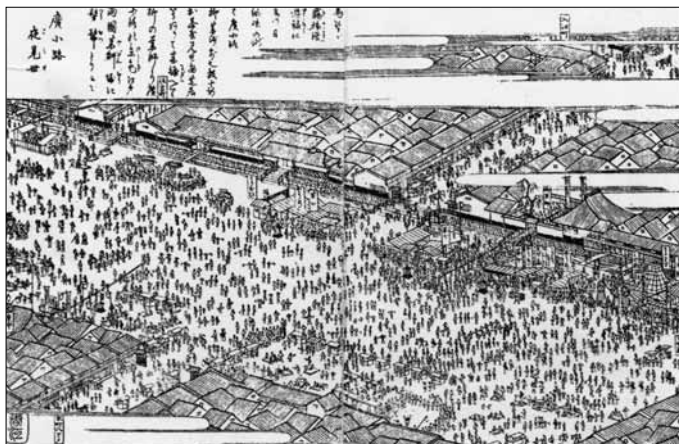


図1 江戸時代の広小路。本町通との交差点付近(尾張名所図絵)

## (2)「栄町」の移動

明治になって、広小路片町と呼ばれていた広小路は、栄町と名付けられました。栄町とは、本町通の西から久屋町までの広小路全体を指す地名でした。愛知県庁が通の東の突き当たりに来たのを始め、警察や郵便などの官庁の多くもこの栄町の沿道に立地しました。

明治18年頃、東海道線の名古屋駅を誘致する時に、将来の町の中心的な道路にと想定されたのが広小路でした。駅は広小路を西に延長することを条件に笹島が選ばれ、20年広小路から笹島までの広幅員道路が整備されました。そして31年には京都に次いで我国で2番目の路面電車が笹島と東の県庁前の間に完成しました。この頃はまだ街の南北の中心は国道でもあった本町通で、今の栄付近には電停もありませんでした。

ところがその頃になると、市の中心部から南部の熱田や将来の港への広幅員道路の必要性が議論されるようになりました。同じ頃、広小路通の路面電車会社が栄町から熱田への延長を企画し、本町通の拡幅を試みました。しかし沿道には有力な商店が多く、理解は得られませんでした。そのため市は今の武平町通付近から熱田への道を模索し始めました。そして県との協議の中で大津通を南に延長拡幅する案を決めました。これに軌道会社も加わって、38年には新しい南部への幹線道路の事業化にこぎつけたのです。



図2 明治時代末の名古屋都心。新しい栄町交差点(○)ができ、路面電車がT字型にのびています

明治40年は名古屋市にとって記念すべき年になりました。熱田町との合併、名古屋港の開港、そしてこの幹線道路、熱田街道の開通です。少し遅れて路面電車も熱田駅まで伸びました。広小路線と交差する所の電停名は「栄町」になりました。ここに今の栄の交差点が、栄町と呼ばれ、特別の意味がある街角に変わったのです。(図2)

## (3) 栄町の発展

その後、市街を南北に結ぶ幹線道路には柳橋から名古屋港を結ぶ道路等も出来ました。しかし栄町からの大津通(熱田街道)は、名古屋城下と熱田や名古屋港など市南部を結ぶ幹線として、本町通に変わって南北の要の道路になりました。

栄町の交差点西南角は、明治10年代から名古屋区、名古屋市の庁舎のあったところですが、40年の火災で移転しました。その跡に、いとう呉服店(現松坂屋)が近代的なデパートをオープンさせました。多くの客を集め、名古屋の街の近代化に一石を投じたのです。また反対側の東北角には赤レンガの日本銀行支店の建物が建ち、栄町は中心地としての環境が出来上がっていきました。

戦後は、栄町から西の広小路通に屋台が出た広プラといわれ、賑わいました。栄町の周りには、オリエンタル中村、丸栄、松坂屋と大きなデパートが3つ揃いました。また市電、市バスも多くの系統が栄町に集まり、さらに地下鉄も開通して、栄町は名古屋の街の中心の地位を不動にしたのです。

## 3 変遷の跡を追って

栄の街の変遷を追って街角を歩いてみましょう。栄からは少し外れますが、地下鉄の丸の内駅からスタートします。(図3)

駅の5番出口を出て東に歩きます。2本目を右に曲がると本町通で、江戸時代の始めはこの通が城下の中心軸でした。南に1本行った角が名古屋宿の中心だった札の辻です。この辻は美濃路が南から西に曲がる所になり、北と東は木曾街道、岡崎街道が



名古屋市の元道路元標。当時は本町通は国道第10号線でした

図3 明治20年代の栄付近と現在(---線)。点々はルート

延びていました。

南に進むと広小路通に出ます。この角は、明治・大正時代までは名古屋の繁華街栄町の中心でした。東南角には昔の名古屋市の道路元標が残されています。東に曲がると広小路通で、昔の町名では栄町2丁目に入ります。

東に1本越えた左側に朝日神社があります。清須の朝日村からの清須越えの神社で、ここには広小路に唯一江戸時代から残るという物があります。それは鳥居の直ぐ横にある目隠しで、斜め前にあった刑場に入出入りする罪人を隠したもので、一帯が戦災で焼けた中で奇跡的に残ったといえます。

東に行くと栄の交差点になります。西南角は明治の初めに名古屋区が置かれ、



江戸時代、名古屋の街道の基点だった札の辻

市役所になり、そして松坂屋、東海銀行、スカイルと変わりました。そこから南に伸びる道がこの栄を今日の街角にした大津通です。その発展の一翼を担った路面電車は昭和43年に廃止されましたが、もう地下鉄の時代に入っていました。

大津通は今では東側には三越、松坂屋、パルコと大型店が分館とともに並び、西には少し離れてナディアパークがあって、人の流れは広小路を圧倒しています。東にパルコの本館と南館の間の細い道に入ります。

すぐ百米道路(久屋大通)に出ます。この通は名古屋の戦災復興計画の目玉として、鍛冶屋町と久屋町の間の家屋を抜いて実現しました。幅百m強、長さは



本町通から広小路をみる。大正時代まではここが栄町の中心でした



江戸時代からの目隠し(鳥居の左奥にかくれて)の残る朝日神社



◀栄の交差点から南の大津通。右角には明治43年、初めてのデパートができました

▼テレビ塔の足元にある薫風発祥の地の碑。芭蕉にとって名古屋は大切な街でした



約2<sup>km</sup>あり、パリのシャンゼリゼ通と同じです。東京青山通に勝ってパリの友好商店街になりました。公園になった中央部は周辺の喧騒さから隔離された都心の別天地です。遠くに見えるテレビ塔に向かって歩くとバスターミナルに出ます。この北は広小路通、錦通と一番賑やかな所です。

テレビ塔は、街のシンボルとして昭和29年全国に先駆けて建設されました。地上90<sup>m</sup>の展望台に上ると、一望できる都心部の中に百米道路の緑の軸線が見事です。

塔の足元に意外な史跡があります。東北にある「薫風発祥の地」の碑です。芭蕉が俳諧から脱して新しい境地を開いた所。それはこの



広小路通の百米道路の東。昔はこの正面に県庁があった



テレビ塔から南。百米道路の緑が都市の軸を作っています

場所で開かれた名古屋の町衆との、後に「冬の日」としてまとめられた句会でした。テレビ塔を後に北に進むとすぐ桜通で、その下に地下鉄の久屋大通駅があります。

## 4 街の形成と道路

街の形成に道路は大きな関わりがあります。道路によってその地域の意味が変わってくるからです。栄町も、明治40年に幹線道路が500<sup>m</sup>東に出来たことが、名古屋の街の中心を本町通から大津通に動かすことになったように思えます。当時は気が付かなかったかも知れませんが、歴史的に見るとその時が1つの曲がり角となっていることが分かります。

道路の拡幅に反対したために、バイパスが建設され、地域が沈んでしまうことはよくある事です。鉄道を拒否して寒村になった街。空港を拒否して隣が栄えることになった街。交通施設は地域の浮沈に大きく関わります。交通路による繁栄は、その多くが交通に依存しているからでしょうか。

このように見ると、今日の栄の繁栄は本町通の拡幅の拒否というところに行き着くことになりそうです。街は時代とともに栄枯盛衰があります。昔栄えた、京町も、札の辻も、広小路本町も、ピークから降りて今は普通の街角になっています。

〈主な参考文献〉

- ①服部聖多朗「名古屋地名年表」(1956、日光堂)
- ②名古屋鉄道広報宣伝部「名古屋鉄道百年史」(1990、名古屋鉄道)
- ③林上「近代都市交通と地域発展」(2000、大明堂)